

テスト技術者資格制度

Foundation Level シラバス日本語版

概要

Version 2018.J01

International Software Testing Qualifications Board



Copyright Notice

This document may be copied in its entirety, or extracts made, if the source is acknowledged.

Copyright © International Software Testing Qualifications Board (以降では ISTQB®) .

Foundation Level 作業部会著者グループ 2018 : Klaus Olsen (Chair), Tauhida Parveen (vice chair), Rex Black (project manager), Debra Friedenberg, Eshraka Zakaria, Hans Schaefer, Judy McKay, Marie Walsh, Meile Posthuma, Mike Smith, Radoslaw Smilgin, Stephanie Ulrich and Steve Toms.

Translation Copyright © 2019, Japan Software Testing Qualifications Board (JSTQB®), all rights reserved.

日本語翻訳版の著作権は JSTQB®が有するものです。本書の全部、または一部を無断で複製し利用することは、著作権法の例外を除き、禁じられています。

改訂履歴

ISTQB®

バージョン	日付	摘要
0.5	2018年1月16日	テスト技術者資格制度 Advanced Level 概要 2012 に基づく初版
0.6	2018年1月18日	イントロダクション、内容、付録のテキストを更新。
1.0	2018年1月19日	クロスレビュー向け技術的編集。
1.1	2018年2月10日	クロスレビュー後の更新
1.2	2018年4月10日	ベータレビュー後の更新
1.0	2018年4月20日	GA パッケージの作成（以前のバージョンは、バージョン番号が 1.0-1.2 と不正に割り当てられており、これを修正）
バージョン 2018 のリリース	2018年6月4日	GA により承認

JSTQB®

Version2018.J00	2019年1月10日	ISTQB Version2018 の日本語翻訳版（ベータ版）
Version2018.J01	2019年3月27日	ISTQB Version2018 の日本語翻訳版

目次

改定履歴	3
目次	4
1. Foundation Level のイントロダクション	6
1.1 テスト担当者のためのキャリアパス	6
1.2 対象者	6
1.3 学習の目的	6
1.4 受験資格	7
1.5 標準規格への対応	7
1.6 最新の維持	7
1.7 構成と研修コース期間	7
1.8 試験の構造	7
2. Foundation Level シラバスの概要	8
2.1. ビジネス成果	8
2.2 内容	8
2.3 ビジネス成果と学習の目的のトレーサビリティマトリクス	10
3. 付録：2018 年度版シラバスにおける主要な変更点	18
4. 日本語版付録：2018 年度版シラバスにおける翻訳の変更点	

謝辞

このドキュメントは、International Software Testing Qualifications Board Foundation Level 作業部会 2018 のコアチームメンバーにより執筆された。Klaus Olsen (chair), Tauhida Parveen (vice chair), Rex Black (project manager), Debra Friedenber, Eshraza Zakaria, Hans Schaefer, Judy McKay, Marie Walsh, Meile Posthuma, Mike Smith, Radoslaw Smilgin, Stephanie Ulrich, and Steve Toms.

本コアチームは、レビューチームおよびすべての国の国際部会のメンバーによる提案と意見に感謝したい。

Foundation Level シラバス 2018 の完成時において、Foundation Level Advanced Level 作業部会のメンバーは以下の通りである。Klaus Olsen (chair), Tauhida Parveen (vice chair), Rex Black (project manager), Corne Kruger, Dani Almog, Ebbe Munk, Eric Riou du Cosquer, Eshraza Zakaria, Debra Friedenber, Hans Schaefer, Igal Levi, Johan Klintin, Judy McKay, Kenji Onishi, Marie Walsh, Meile Posthuma, Mike Smith, Radoslaw Smilgin, Rashed Karim, Stephanie Ulrich, Stevan Zivanovic, Steve Toms, Sunny Kwon, Thomas Müller, Vipul Kocher, and Yaron Tsubery.

次のメンバーが、このドキュメントのレビュー、意見表明および投票に参加した（アルファベット順）。Tom Adams, Tobias Ahlgren, Xu Aiguo, Chris Van Bael, Katalin Balla, Graham Bath, Gualtiero Bazzana, Arne Becher, Veronica Belcher, Lars Hilmar Bjørstrup, Ralf Bongard, Armin Born, Robert Bornelind, Mette Bruhn-Pedersen, Geza Bujdosó, Earl Burba, Filipe Carlos, Young Jae Choi, Greg Collina, Alessandro Collino, CuiZhe, Taz Daughtrey, Matthias Daigl, Wim Decoutere, Frans Dijkman, Klaudia Dussa-Zieger, Yonit Elbaz, Ofer Feldman, Mark Fewster, Florian Fieber, David Frei, Debra Friedenber, Conrad Fujimoto, Pooja Gautam, Thorsten Geiselhart, Chen Geng, Christian Alexander Graf, Dorothy Graham, Michel Grandjean, Richard Green, Attila Gyuri, Hagar, Kobi Halperin, Matthias Hamburg, Zsolt Hargitai, Satoshi Hasegawa, Berit Hatten, Wang Hongwei, Tamás Horváth, Leanne Howard, Chinthaka Indikadahena, J. Jayapradeep, Kari Kakkonen, Gábor Kapros, Beata Karpinska, Karl Kemminger, Kwanho Kim, Seonjoon Kim, Cecilia Kjellman, Johan Klintin, Corne Kruger, Gerard Kruijff, Peter Kunit, Hyeyong Kwon, Bruno Legeard, Thomas Letzkus, Alon Linetzki, Balder Lingegård, Tilo Linz, Hongbiao Liu, Claire Lohr, Ine Lutterman, Marek Majernik, Rik Marselis, Romanos Matthaios, Judy McKay, Fergus McLachlan, Dénes Medzihradzky, Stefan Merkel, Armin Metzger, Don Mills, Gary Mogyorodi, Ninna Morin, Ingvar Nordström, Adam Novak, Avi Ofer, Magnus C Ohlsson, Joel Oliviera, Monika Stocklein Olsen, Kenji Onishi, Francisca Cano Ortiz, Gitte Ottosen, Tuula Pääkkönen, Ana Paiva, Tal Pe'er, Helmut Pichler, Michaël Pilaeten, Horst Pohlmann, Andrew Pollner, Meile Posthuma, Vitalijs Puiso, Salvatore Reale, Stuart Reid, Ralf Reissing, Shark Ren, Miroslav Renda, Randy Rice, Adam Roman, Jan Sabak, Hans Schaefer, Ina Schieferdecker, Franz Schiller, Jianxiong Shen, Klaus Skafte, Mike Smith, Cristina Sobrero, Marco Sogliani, Murian Song, Emilio Soresi, Helder Sousa, Michael Sowers, Michael Stahl, Lucjan Stapp, Li Suyuan, Toby Thompson, Steve Toms, Sagi Traybel, Sabine Uhde, Stephanie Ulrich, Philippos Vakalakis, Erik van Veenendaal, Marianne Vesterdal, Ernst von Düring, Salinda Wickramasinghe, Marie Walsh, Søren Wassard, Hans Weiberg, Paul Weymouth, Hyungjin Yoon, John Young, Surong Yuan, Ester Zabar, and Karolina Zmitrowicz.

このドキュメントは、2018年6月4日に開催されたISTQB®の総会で正式に承認され、発行された。

1. Foundation Level のイントロダクション

本書は、Foundation Level シラバスの主要な原則、および概要の紹介が必要な ISTQB Foundation Level に関心があるすべての人を対象としている。

本書は、Foundation Level シラバスの概要とビジネス成果を説明している。本書は、Foundation Level を達成しようとしている人が必要とする特定の情報を提供し、特にテストに関する基礎レベルのスキル開発を促進している企業に役立つよう構成されている。

Foundation Level シラバスの 2011 年度版をすでに熟知または使用している方のために、主な改訂内容を本シラバスの付録にまとめた。また、ISTQB は別のリリースノートドキュメントで、Foundation Level シラバスの学習の目的について、2011 年度版から 2018 年度版への追加、更新、削除に関する情報を提供している。

(日本語版追記：2018 年度版からの日本語訳の重要な変更に関して本書の最後に記載している。)

1.1 テスト担当者のためのキャリアパス

ISTQB スキームは、Foundation Level を始めとして、それに続く Advanced Level、Expert Level の 3 つの認定スキームを提供して、プロのテスト担当者向けにキャリアパスを定義している。Foundation Level シラバスにはアドオンがある。アドオンは、アジャイルテスト担当者シラバスが該当する。その他に専門化したトピックとして、スペシャリスト向けシラバス (例えば、モデルベースドテスト担当者シラバス) がある。

Foundation Level の認定資格を持つ人は、Advanced Level を学習することにより、テストに関する理解を拡張できる。

Advanced Level では、上位レベルである Expert Level で習得する各種のスキルおよび知識の基盤を確立する。テストマネージャーとしての実務を経験した後に、例えばテストマネジメント領域において Expert Level 認定を取得してテストプロセスを改善していくことで、テスト業務でのキャリアをさらに伸ばすことを選択できる。

ISTQB の最新のキャリアパスの概要については、www.istqb.org を参照されたい。

1.2 対象者

Foundation Level 資格は、ソフトウェアテストに関与する、または関心を抱いているあらゆる人々を対象にする。Foundation Level 資格の対象者には、テスト担当者、テストアナリスト、テストエンジニア、テストコンサルタント、テストマネージャー、ユーザー受け入れテスト担当者、ソフトウェア開発担当者などが含まれる。この Foundation Level 資格は、ソフトウェアテストについて基本的な理解を望む方、例えば、プロジェクトマネージャー、品質管理マネージャー、ソフトウェア開発マネージャー、ビジネスアナリスト、IT 部門長、経営コンサルタントのような人にも適切である。

1.3 学習の目的

全体を通して、Foundation Level シラバスのすべての内容は、イントロダクションと付録を除いて K1 レベルで試験対象である。つまり、受験志願者は本シラバスの 6 つの章で説明されている用語と概念について認識し、記憶し、想起することになる。

K1、K2、K3 レベルでの学習の目的は、Foundation Level シラバスの各章の初めに記載している。

1.4 受験資格

ISTQB Certified Tester Foundation Level ソフトウェアテスト試験へ申し込むための基準は、志願者がソフトウェアテストに興味を持っているか、ということであるが、志願者が以下のことについても満たしていることを強く求めている。

- システムテストやユーザー受け入れテストなどのテスト担当、もしくはソフトウェア開発担当など、最低 6 ヶ月程度、技術者としての経歴があること。
- ISTQB®に加盟している各国の委員会（日本では JSTQB®が該当する）によって認定された教育コースを受けていること。

1.5 標準規格への対応

Foundation Level シラバスでは、多くの標準規格（IEEE、ISO など）を参照している。これらを参照する目的は、フレームワーク（品質特性については ISO 25010 で参照ができるなど）を提供すること、または、本資料の読者が希望する場合には追加の情報源を提供することである。ただし、シラバスは標準規格資料を参考文献として利用しているだけであり、試験の対象にはしていない。

1.6 最新の維持

ソフトウェア業界は急速に変化している。これらの変化に対応して最新の正確な情報へのアクセスを提供するために、ISTQB ワークグループが www.istqb.org Web サイトを定期的に更新し、サポート資料、標準規格への変更を参照できるようにしている。ただし、この最新情報は Foundation Level シラバスでのテスト対象でない。

1.7 構成と研修コース期間

Foundation Level シラバスは 6 つの章で構成されており、テスト担当者に要求される基本的な知識とスキルをカバーしている。各章の一番上の見出しは、章の学習時間を指定している。章より下のレベルでは、時間は指定されていない。シラバス全体では、16 時間 45 分を想定している。

- 第 1 章：テストの基礎 - 学習時間 175 分
- 第 2 章：ソフトウェア開発ライフサイクル全体を通してのテスト - 学習時間 100 分
- 第 3 章：静的テスト - 学習時間 135 分
- 第 4 章：テスト技法 - 学習時間 330 分
- 第 5 章：テストマネジメント - 学習時間 225 分
- 第 6 章：テスト支援ツール - 学習時間 40 分

1.8 試験の構造

Foundation Level の認定資格試験は、ドキュメント「ISTQB CTFL 2018 Exam Structure and Rules（試験構成とルール）」（www.istqb.org）にて定義している。

試験の形式は多肢選択式である。問題の数は 40 である。問題の 65%（26 の問題）以上を正解した場合に合格となる。

試験は、認定トレーニングコースの一部として、または（例えば試験センターや公的試験で）独立して実施してもよい。認定トレーニングコースの受講完了は試験のための前提条件ではない。

2. Foundation Level シラバスの概要

2.1. ビジネス成果

このセクションでは、Foundation Level 認定を取得した認定資格者に期待されるビジネス成果をリストする。

Foundation Level 認定資格者は次のビジネス成果を達成できる。

FL-BO1	ソフトウェアテストを行う際に共通の語彙を使うことで効率的で効果的なコミュニケーションを促進する。
FL-BO2	ソフトウェアテストの基本概念を理解する。
FL-BO3	さまざまな状況で最も適切なテストを行うために当てはまる開発やテストのさまざまな実践例、テストを行う上でのさまざまな制約に対する理解を明示する。
FL-BO4	効果的なレビューに貢献する。
FL-BO5	テストを設計するために確立された技法をすべてのテストレベルで使用する。
FL-BO6	ある特定のテスト仕様からテストケースを実装し実行する。テスト結果を報告する。
FL-BO7	リソース、戦略、計画、プロジェクトコントロール、リスクマネジメントに対するテストマネジメントの原則を理解する。
FL-BO8	明確で理解しやすい欠陥レポートを記述して伝える。
FL-BO9	テストの優先度とテストアプローチを決定するプロジェクトの要因を理解する。
FL-BO10	ソフトウェアテストがステークホルダーにもたらす価値を理解する。
FL-BO11	プロジェクトの目的、状況、対象に合わせてテスト活動を行い、作業成果物を作成する方法を認識する。
FL-BO12	テストツールの選択および実装のプロセスを支援する。

2.2 内容

第1章：テストの基礎

- テストに関連する基本的な原則、テストが必要な理由、テスト目的、テストを成功させるための原則を学習する。
- テストプロセス、主要な活動、作業成果物について理解する。

第2章：ソフトウェア開発ライフサイクル全体を通してのテスト

- ソフトウェア開発ライフサイクルのすべての段階にテストが組み込まれることを学習する。
- さまざまなテストレベル、テストタイプ、メンテナンステストで作業する際の影響度分析について学習する。

第3章：静的テスト

- 静的解析やレビュー（非形式的レビュー、ウォークスルー、テクニカルレビュー、インスペクション）など、さまざまな静的テスト技法を学習する。
- 作業成果物の欠陥を検出するために、レビュー技法の適用方法を学習する。

第4章：テスト技法

- ソフトウェア作業成果物からテストケースを導出するためにテスト技法の適用方法を学習する。
- ブラックボックス、ホワイトボックス、経験ベースのテストをカバーする。

第5章：テストマネジメント

- テストマネジメントは、特にリスクベースドテスト、テスト実行、欠陥の報告と対応に関して、テスト担当者がテストマネージャーと一緒に作業できることをカバーする。
- テストで文書化するさまざまな作業成果物（テスト計画やレポートなど）を学習する。
- 欠陥を明確で理解しやすく報告する方法を学習する。

第6章：テスト支援ツール

- ツールの分類、ツールに付随するリスクとメリット、ツールの選択と導入を行う際の考慮事項を学習する。

2.3 ビジネス成果と学習の目的のトレーサビリティマトリクス

本セクションでは、Foundation Level のビジネス成果と学習の目的のトレーサビリティを一覧する。

ビジネス成果：CTFL		FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
BO1	ソフトウェアテストを行う際に共通の語彙を使うことで効率的で効果的なコミュニケーションを促進する。	27											
BO2	ソフトウェアテストの基本概念を理解する。		12										
BO3	さまざまな状況で最も適切なテストを行うために当てはまる開発やテストのさまざまな実践例、テストを行う上でのさまざまな制約に対する理解を明示する。			13									
BO4	効果的なレビューに貢献する。				10								
BO5	テストを設計するために確立された技法をすべてのテストレベルで使用する。					15							
BO6	ある特定のテスト仕様からテストケースを実装し実行する。テスト結果を報告する。						8						
BO7	リソース、戦略、計画、プロジェクトコントロール、リスクマネジメントに関するテストマネジメントの原則を理解する。							9					
BO8	明確で理解しやすい欠陥レポートを記述して伝える。								3				
BO9	テストの優先度とテストアプローチを決定するプロジェクトの要因を理解する。									12			
BO10	ソフトウェアテストがステークホルダにもたらす価値を理解する。										8		
BO11	プロジェクトの目的、状況、対象に合わせてテスト活動を行い、作業成果物の作成方法を認識する。											11	
BO12	テストツールの選択および実装のプロセスを支援する。												6

ビジネス成果：CTFL			FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
個別の LO	バージョン 2018 の LO	K レベル 2018												
第 1 章	テストの基礎													
1.1	テストとは何か？													
FL-1.1.1	テストに共通する目的を再認識する (K1)	K1		X								X		
FL-1.1.2	デバッグとテストとを区別する (K2)	K2	X											
1.2	テストの必要性													
FL-1.2.1	例を挙げてテストの必要性を説明する (K2)	K2	X									X		
FL-1.2.2	テストと品質保証の関係を説明し、品質を確保する上でテストがどう貢献するかを、例を挙げて説明する (K2)	K2		X										
FL-1.2.3	エラー、欠陥、故障を区別する (K2)	K2	X							X				
FL-1.2.4	欠陥の根本原因と結果を区別する (K2)	K2								X				
1.3	テストの 7 原則													
FL-1.3.1	テストにおける 7 原則を説明する (K2)	K2			X						X			
1.4	テストプロセス													
FL-1.4.1	テストを取り巻く環境がテストプロセスに与える影響を説明する (K2)	K2		X				X					X	
FL-1.4.2	テストプロセスにおけるテストの活動と関連するタスクを説明する (K2)	K2	X					X			X		X	
FL-1.4.3	テストプロセスを支援する多くの作業成果物を区別する (K2)	K2				X		X			X	X	X	

ビジネス成果 : CTFL			FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
FL-1.4.4	テストベースとテスト作業成果物との間のトレーサビリティを維持することがなぜ必要であるかを説明する (K2)	K2										X	X	
1.5	テストの心理学													
FL-1.5.1	テストの成否は心理的要素に影響されることを識別する (K1)	K1		X							X			
FL-1.5.2	テストの活動とソフトウェア開発の活動で必要となるマインドセットが違うことを説明する (K2)	K2		X							X			
第2章	ソフトウェア開発ライフサイクル全体を通してのテスト													
2.1	ソフトウェア開発ライフサイクルモデル													
FL-2.1.1	ソフトウェア開発ライフサイクルにおけるソフトウェア開発活動とテスト活動の関係を説明する (K2)	K2			X						X			
FL-2.1.2	ソフトウェア開発ライフサイクルモデルをプロジェクトやプロダクトの特性に合わせて調整する必要がある理由を識別する (K1)	K1			X						X			
2.2	テストレベル													
FL-2.2.1	目的、テストベース、テスト対象、典型的な欠陥と故障、アプローチや責務の観点から、さまざまなテストレベルを比較する (K2)	K2	X			X					X		X	
2.3	テストタイプ													
FL-2.3.1	機能テスト、非機能テスト、ホワイトボックステストを比較する (K2)	K2	X				X							

ビジネス成果 : CTFL			FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
FL-2.3.2	あらゆるテストレベルで機能テスト、非機能テスト、ホワイトボックステストが行われることを理解する (K1)	K1					X							
FL-2.3.3	確認テストとリグレッションテストの目的を比較する (K2)	K2	X					X						
2.4	メンテナンステスト													
FL-2.4.1	メンテナンステストを引き起こすものを要約する (K2)	K2			X									
FL-2.4.2	メンテナンステストにおける影響度分析の役割を説明する (K2)	K2			X						X			
第3章	静的テスト													
3.1	静的テストの基本													
FL-3.1.1	さまざまな静的テスト技法を使用して検査できるソフトウェア成果物の種類を認識する (K1)	K1		X		X								
FL-3.1.2	静的テストの価値を説明する例を使用する (K2)	K2				X								
FL-3.1.3	静的技法と動的技法について、目的、識別対象の欠陥の種類、ソフトウェアライフサイクル内でのこれらの技法の役割を考慮して、違いを説明する (K2)	K2	X			X						X		
3.2	レビュープロセス													
FL-3.2.1	作業成果物に対するレビュープロセスの活動を要約する (K2)	K2				X								
FL-3.2.2	形式的レビューにおけるさまざまな役割と責務を認識する (K1)	K1	X			X								
FL-3.2.3	さまざまなレビューの種類 (非形式的レビュー、ウォークスルー、テクニカルレビュー、およびインスペクション) の	K2				X								

ビジネス成果 : CTFL			FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
	違いを説明する (K2)													
FL-3.2.4	欠陥を識別するためにレビュー技法を作業成果物に適用する (K3)	K3			X									
FL-3.2.5	レビューの成功に貢献する要因を説明する (K2)	K2			X									
第 4 章	テスト技法													
4.1	テスト技法のカテゴリ													
FL-4.1.1	ブラックボックステスト技法、ホワイトボックステスト技法、および経験ベースのテスト技法の特長、共通点、および相違点を説明する (K2)	K2	X				X							
4.2	ブラックボックステスト技法													
FL-4.2.1	ある特定の要件からテストケースを導出するために同値分割法を適用する (K3)	K3					X							
FL-4.2.2	ある特定の要件からテストケースを導出するために境界値分析を適用する (K3)	K3					X							
FL-4.2.3	ある特定の要件からテストケースを導出するためにデシジョンテーブルテストを適用する (K3)	K3					X							
FL-4.2.4	ある特定の要件からテストケースを導出するために状態遷移テストを適用する (K3)	K3					X							
FL-4.2.5	ユースケースからテストケースを導出する方法を説明する (K2)	K2					X							
4.3	ホワイトボックステスト技法													
FL-4.3.1	ステートメントカバレッジを説明する (K2)	K2	X				X							

ビジネス成果 : CTFL			FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
FL-4.3.2	デシジョンカバレッジを説明する (K2)	K2	X				X							
FL-4.3.3	ステートメントカバレッジとデシジョンカバレッジの価値を説明する (K2)	K2	X				X							
4.4	経験ベースのテスト技法													
FL-4.4.1	エラー推測を説明する (K2)	K2	X				X	X						
FL-4.4.2	探索的テストを説明する (K2)	K2	X				X	X						
FL-4.4.3	チェックリストベースドテストを説明する (K2)	K2	X				X	X						
第5章	テストマネジメント													
5.1	テスト組織													
FL-5.1.1	独立したテストの利点と欠点を説明する (K2)	K2			X							X	X	
FL-5.1.2	テストマネージャーとテスト担当者の作業を識別する (K1)	K1	X		X				X					
5.2	テストの計画作業と見積り													
FL-5.2.1	テスト計画書の目的と内容を要約する (K2)	K2		X	X				X					X
FL-5.2.2	さまざまなテスト戦略の違いを明確にする (K2)	K2		X	X				X					X
FL-5.2.3	可能性のある開始基準と終了基準の例を示す (K2)	K2					X							X
FL-5.2.4	ある特定のテストケースのセットに対するテスト実行のスケジュールを立てるため、優先順位付けの知識、技術的および論理的な依存関係の知識を適用する (K3)	K3	X					X	X					
FL-5.2.5	テストに関連する工数に影響を与える要因を識別する (K1)	K1	X	X	X				X		X			
FL-5.2.6	マトリクスを使った見積りと専門家による見積りの違いを説明する (K2)	K2	X						X		X			

ビジネス成果 : CTFL			FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
5.3	テストのモニタリングとコントロール													
FL-5.3.1	テストで使用するメトリクスを想起する (K1)	K1	X						X					
FL-5.3.2	テストレポートの目的、内容、および読み手を要約する (K2)	K2	X	X										
5.4	構成管理													
FL-5.4.1	構成管理がテストをどのように支援するかを要約する (K2)	K2	X	X	X				X					
5.5	リスクとテスト													
FL-5.5.1	可能性と影響を考慮してリスクレベルを定義する (K1)	K1	X											
FL-5.5.2	プロジェクトリスクとプロダクトリスクの違いを認識する (K2)	K2	X		X								X	
FL-5.5.3	プロダクトリスク分析がテストの十分さ、およびテストの範囲にどのように影響するか例を挙げて説明する (K2)	K2	X		X				X			X	X	
5.6	欠陥マネジメント													
FL-5.6.1	テスト時に見つかった欠陥を修正するために欠陥レポートを記述する (K3)	K3								X				
第 6 章	テスト支援ツール													
6.1	テストツールの考慮事項													
FL-6.1.1	テストツールをその目的と支援するテスト活動に従って分類する (K2)	K2	X	X										X
FL-6.1.2	テスト自動化の利点とリスクを識別する (K1)	K1									X			X
FL-6.1.3	テスト実行ツールとテストマネジメントツールの特別な考慮事項を記憶する (K1)	K1												X
6.2	ツールの効果的な使い方													
FL-6.2.1	ツールを選択する際の主な原則を	K1												X

ビジネス成果 : CTFL			FL-BO 1	FL-BO 2	FL-BO 3	FL-BO 4	FL-BO 5	FL-BO 6	FL-BO 7	FL-BO 8	FL-BO 9	FL-BO 10	FL-BO 11	FL-BO 12
	識別する (K1)													
FL-6.2.2	ツールを導入する際にパイロットプロジェクトを使用する目的を想起する	K1												X
FL-6.2.3	組織内でテストツールの評価、実装、導入、継続的なサポートを成功させる要因を識別する (K1)	K1										X		X

3. 付録：2018 年度版シラバスにおける主要な変更点

ISTQB Foundation Syllabus 2018 は、2011 年度版シラバスを書き直したメジャーアップデートである。このため、章やセクションごとの詳細なリリースノートはないが、以下に、本書の主要な変更の要約を示す。また、ISTQB は別のリリースノートドキュメントで、学習の目的について、2011 年度版から 2018 年度版への追加、更新、削除に関する情報を提供している。

2017 年初頭までに、100 を超える国で 55 万人を超える人が Foundation Level の試験を受験し、世界で 50 万人を超えるテスト技術者が認定を受けている。これらの受験者のすべてが試験に合格するために Foundation Level シラバスを読んでいることが想定されるため、本シラバスは最も多く読まれたソフトウェアテストのドキュメントである。

このメジャーアップデートでは、これまでの財産を受け継ぎながら、世界中のテストコミュニティの次世代の 50 万人に ISTQB が優れた価値を提供できるよう改善が行われている。

本バージョンでは、すべての学習の目的はそれだけで 1 つのまとまりとなるように編集されており、各学習の目的から関連する内容への 1 対 1 のトレーサビリティを確立しており、学習の目的がない内容は存在しない。

目標は、本バージョンを、読みやすく、理解しやすく、学習しやすく、翻訳しやすくすることであり、実務における有用性の向上や、知識とスキルのバランスに重点を置いた。

本メジャーリリースの変更点は以下の通り。

- 全体的に K1 の学習の目的 (LO) を少なくした。
 - 2011 年度版の 27 LO に対して、2018 年度版では 15 LO。
- 第 5 章テストマネジメントの説明を少なくした。
 - 2011 年度版の 24 LO に対して、2018 年度版では 15 LO。
- レビューの説明に重点を置き、第 3 章に K3 LO を 1 つ追加した。
 - 静的解析のツールに関する説明を削除した。他のシラバスでカバーすることとなる。
- 第 4 章でテスト技法の説明を増やした。
 - 2011 年度版の 4.1 節は第 1 章の 1.4 節へ統合した。
- アジャイルに関して、シラバス内で言及している。
 - しかし、LO ではアジャイル関連の言葉を使用していない。
- ホワイトボックス技法については、扱いを小さくした。
 - K4 と K3 を削除した。これらは他のシラバスでカバーすることとなる。

2018 年度版 Foundation Syllabus のその他の変更点は以下の通り。

1. IEEE Standard 829 の代わりに ISO/IEC/IEEE 29119 を標準として使用した。
2. ISO 9126 の代わりに ISO/IEC 25010 を標準として使用した。
3. IEEE 1028 の代わりに ISO/IEC 20246 を標準として使用した。

Code of Ethics (倫理綱領) を第 1 章から ISTQB.ORG Web サイトに移動した。

4. 日本語版付録：2018年度版シラバスにおける翻訳の変更点

2018年度版のシラバスでは、前述した通り2011年度版からの変更が多く入っている。このシラバスの日本語版を翻訳するにあたり、これまでの翻訳と変更した点がいくつかある。特に影響の大きい変更は以下の通りである。

1. キーワードの訳語変更

原文の用語	2011年度版での訳語	2018年度版での訳語	シラバスでの章
Equivalence partition	同値分割	同値パーティション	4章
Formal review	公式レビュー	形式的レビュー	3章
Informal review	非公式レビュー	非形式的レビュー	3章
Maintenance testing	保守テスト	メンテナンステスト	2章
Methodical strategy	方法論的戦略	系統的戦略	5章
Regression	回帰	リグレッション	1章、4章、5章、6章

上記の用語は、日本語訳を変更しただけであり、ISTQBのシラバスとしては変更がない。これまでとは違う概念になったわけではないことを注記しておく。

2. 2011年度版シラバスで使われていたが、2018年度版シラバスでは使われなくなった用語

- インシデント (Incident)
 - 2018年度シラバスでは、インシデントについての記載がなくなった。インシデントレポートは、欠陥レポートと呼ぶようになっており、インシデントと同様の概念としては不正 (Anomaly) という用語が使われるようになっている。
- 終了基準の評価とレポート (Evaluating Exit Criteria and Reporting)、テスト終了作業 (Test Closure)
 - 2018年度シラバスでは、これらの活動をまとめてテスト完了 (Test Completion) という用語で呼ぶようになった。

3. カタカナ表記の長音符のルール変更

カタカナ表記に関して、長音符のルールを変更した。以下に代表的なものを列挙する。

2011年度版の表記	2018年度版の表記
アーキテクチャ	アーキテクチャー
インタフェース	インターフェース
オペレータ	オペレーター
コンピュータ	コンピューター
ステークホルダ	ステークホルダー
ファシリテータ	ファシリテーター
プログラマ	プログラマー
マイルストーン	マイルストーン
マネージャ	マネージャー
メンバ	メンバー
モデレータ	モデレーター
ユーザ	ユーザー
ユーザストーリー	ユーザーストーリー
リーダー	リーダー